

卒業記念発表会の取り組みとその教育効果について

島田 直美・成田 潤子・安倍 利佳・江刺 香織・新田 成彦・野崎 哲也

Efforts of graduation memorial presentation and its educational effect

Naomi Shimada, Junko Narita, Rika Abe, Kaori Esashi, Naruhiko Nitta, Tetsuya Nozaki

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別冊

平成 30 年 2 月 28 日 発行

卒業記念発表会の取り組みとその教育効果について

Efforts of graduation memorial presentation and its educational effect

島田直美・成田潤子・安倍利佳・江刺香織・新田成彦・野崎哲也

Naomi Shimada・Junko Narita・Rika Abe・Kaori Esashi・Naruhiko Nitta・Tetsuya Nozaki
はじめに

旭川福祉専門学校では、卒業時の学習の総まとめとして、1977年（昭和52年）の1期生卒業時から発表会の制作に取り組んでいる。当初は、2年間の練習の成果を発表するピアノの演奏会という形で始まった卒業発表であるが、現在は教育課程上「卒業演習」としての位置づけを持ち、卒業記念誌『涓滴』の編集・発行と卒業記念発表会の2つに取り組んでいる。このような活動は、よく「2年間の学びの集大成」と言われるが、2年間の学びの成果がこの活動に生かされていくだけではなく、この卒業記念発表会への取り組みを通して、学生一人ひとりが更に一層の成長を遂げていくことを目標に取り組まれている活動である。この活動を通して、学生は保育者として、人間として大きく成長して卒業を迎え、社会へと歩んでいくのである。

本稿は、今年度で42回目を迎えるこの「卒業記念発表会」への取り組みについて、あらためて振り返り、保育者としての育ちに本活動がいかに関わり、本校の保育者養成においていかに教育効果を高めているか、その意義を再確認するとともに、今後の活動の方向性について検討するための課題を探ることを目的とする。卒業記念発表会は、本校における2年間のあらゆる学びの集大成として取り組まれる活動であり、そこで求められる能力は多岐にわたる。そこで、可能な限り様々な領域から本活動の意義を捉えるため、専任教員各自が担当する諸領域について捉えていくこととする。

1. 卒業記念発表会の沿革

本校は保育士養成校として1975年（昭和50年）に開校。以来42年間「敬天愛人」を建学の精神に専門的な知識・技術に加え、心豊かな人間性と感性を持った保育士、福祉従事者の養成を目指して教育活動に取り組んできた。地域の子ども達やお母さん方との触れ合いから学ぶ「地域支援活動」や「子育て支援活動」、豊かな自然環境の中で子ども達と一緒に遊び、体験する「森のほいくえん」など、本校独自のカリキュラムの中で、学生は様々な体験や学習をしている。その学生にとっての集大成である「卒業記念発表会」は、単に2年間の学びを発表するだけではなく、学生が主体となって企画、運営に取り組むことや、こども学科1年生、2年生全員で協力して創作に取り組む過程を通して互いに高め合い、保育・幼児教育の現場で求められる実践力を育むことを目的に取り組んできた。

昭和 52 年に旭川市民文化会館小ホールで開催された第 1 回から現在まで、発表の内容や、開催場所の変更などはあるが、創意工夫をしながら継続している。参加する学生の人数や意識の違いもあるが、2 年間の集大成として取り組む目的は変わらず先輩から後輩へと引き継がれ、保育所、幼稚園、福祉施設、家族など多くの方々に見て頂く実践の場であり、大きな学びの機会となっている。

平成 20 年、第 32 回目からは「司会進行」「人形劇」「オペレッタ」の 3 部門に分かれて開催するようになり、それぞれの部門内での準備や練習、実施を通して「音楽表現」「人間関係」「造形」「表現」「環境」などそれぞれの領域を含めた総合的な学びへと繋がるよう体制を整え、学生一人ひとりにとっての充実した活動を目指している。また、平成 22 年、第 34 回からは東川町での開催となり、旭川市及び近郊の保育所、幼稚園の子ども達を対象とした公演を 3 日間で 5 回、一般公演 2 回、計 7 回の公演を行っており、1,000 名を超えるの方々に見て頂くことができている。また、その中には本校、介護福祉科、医薬福祉学科、日本語学科の学生も含まれており、台湾やベトナム、タイなどから日本語を学びに来ている留学生と学科や学年、国籍も超えて交流を深め、学び合う機会にもなっている。

2 年生にとっては 2 年間の集大成となる「卒業記念発表会」であるが、企画、運営の中心となる運営委員を 1、2 年生混合で組織することによって、1 年生も主体的に参加することとなり、2 年生との活動を通して自分達の目指すべき目標を見定める大きな学びの機会となっている。2 年生は「人形劇」「オペレッタ」「司会進行」の 3 部門に所属する他、全体合唱の指揮者、伴奏者を担当する。1 年生は「1 年生合唱」「手作りおもちゃの制作・展示」に全員が取り組む他、1 年生合唱の指揮者、伴奏者を担当、その他、保育所や幼稚園の受け入れ、案内状の発送などを担当する庶務、各部門の照明、会場やステージの設営、物品の搬入、撤収、駐車場の誘導などもすべて学生達の手で担当することとなる。準備から後片付けまでの実践を通して 2 年生と一緒に活動することになるが、この短期間の集中した関わりの中で培われる人間関係、信頼関係が土台となり、社会生活で必要となる協調性を育むことへと繋がり、集団の中で自分自身と向き合う大きなきっかけになっている。

少子化や情報化など、子ども達を取り巻く環境は急激に変化しており、保育、幼児教育の現場では様々な課題や葛藤と向き合うこととなるが、本校、こども学科の多くの卒業生が現場で活躍し続けていることも「卒業記念発表会」での成長、学びが大きく関わっていると思われる。講義や演習、実習など 2 年間の学びや体験を統合し、実践で活かす力を身につけるための総まとめであり、旭川福祉専門学校こども学科で 42 年間に渡って取り組んできた「卒業記念発表会」を、どのように継続していくかが本校、こども学科にとっても大きな課題であると考えている。

2. 音楽表現の観点から

卒業記念発表会の中でも、「オペレッタ部門」と「一年生合唱」「合同合唱」と呼んでいる活動について、音楽表現の観点から学生たちがどのように成長していくかを報告する。オペレッタ部門は、毎年 10 人～20 人の学生によって形成される。本校では、制作の全てを自分たちの力で賄うことで、保育者としての感性を養うことを目標としている。そのため、学生たちの活動は多岐にわたり、様々な

壁に立ち向かうことになる。その過程で、表現することの責任と楽しさを実感し、又、自己解放を体験することで仲間と協力することの大切さや達成感を味わうことを目的としているのである。

「オペレッタ部門」では、16小節程度だが、作曲に挑戦している。歌詞を考え、ピアノを使用しメロディを決めていく。伴奏は、ほとんどI・IV・Vの和音が主で、フィナーレ等長い曲は転調にも挑戦する。教員は、学生たちの描く曲に仕上がるようアドバイスするが、基本的には学生の自主的な活動を尊重している。最近では、学生たち自らが考案した方法で曲作りを協力している姿がある。それは、スマートフォンの録音機能を使用し、ピアノが苦手な学生でも、とにかく「好きなように歌って録音し聴き直す」ことを繰り返しながら完成させるのである。聴いたメロディを楽譜にすることは簡単ではないが、経験のある学生がリードし協力している。ここで、それまでの授業で経験した曲や童謡のコード進行が身についているか、記譜法を理解しているかが重要となり、学生たちは反省も含めそれまでの学びをフィードバックすることになる。

曲ができると、演奏練習である。演技練習と並行して行われ発声練習から始まり、姿勢、音量、発音に気を付け互いに注意しながら進めていく。はじめは人前で歌うのが苦手な学生たちも、練習を重ねるうちにしっかりとした態度でステージに立とうとするようになる。伴奏もピアノだけでなくマリリンバやビブラフォン、リコーダーやフルート等も使用し、少しでも厚みのある音楽を作り上げようと努力するようになる。先にも述べたように、全員がなにがしかの楽器に携わる方針で進めている。苦手であっても配役の関係でピアノを弾かざるを得ない場面もあり、仲間に指導されながら演奏できるようになり、本番では、皆がほとんど暗譜で演奏するようになる。効果音も身近な楽器を使用し、演技練習の中で試行錯誤していく。また、演奏だけでなくダンスも各曲に合わせて考え踊っている。自分たちの作った音楽のリズムを感じ、身体表現にまで昇華させる。練習は大変だが、旋律とリズムのエネルギーを感じ取り、思い切り歌い踊ることで、音楽そのものの持つ力を体感することができる。この「思い切り身体を使い音楽を表現する」ことがオペレッタの醍醐味の一つで、大きな教育効果を期待するところである。実際、ここまでの作業で、はじめは互いに遠慮し意見を発信することができない学生たちも、より良いものを作り上げようとする意欲が高まる中で、次第に解放され、責任感とともに、他者とのコミュニケーションの大切さを実感するようになる。このように、オペレッタ制作による保育士・幼稚園教諭養成としての教育効果は、演奏技術の向上もさることながら、音楽のエネルギーを介した内面的変化が最も重要と言えよう。

卒業記念発表という名称だが、一年生にとっても重要な活動となっているのが、「一年生合唱」である。子どもたちになじみのある童謡や歌い継ぎたい唱歌などを合唱にした作品を一曲と、卒業をテーマにした作品を一曲、合計二曲を演奏する。HRや昼休み、放課後等の時間も費やし、パート練習から合わせまで、運営委員と呼ばれる代表学生と指揮者、伴奏者の学生を中心に練習計画を立てることから始め、仲間の意欲を高めるにはどのようにしたら良いか腐心する。はじめは、あまり口を開かない学生も、二年生の真剣な姿に刺激され、本番が近づくとつれて自分たちが受け持つステージ「一

年生合唱」を成功させようという気持ちが高まり、聴く人の心を打つ演奏にまで仕上がってくる。この自発的な行動が起こったとき、本活動の目的が達成されることとなる。

1年・2年「合同合唱」は発表会最後のプログラムであり、「ともしびを高くかかげて」と「大地讃頌」を演奏する。カレッジソングとして歌い継がれているもので、卒業生や一般の観客も楽しみにしている。なぜなら、学生たちの心のもった歌声は、聴く人の心にストレートに届き琴線に触れることとなるからである。学生たちは、演奏が成功しているかどうか不安な中、互いを思いやり、心を一つにしようと考え必死で歌っている。その一心不乱な姿に、感動し涙を流している観客を前にして、今度は学生たちが、自分たちの信じていたものが間違っていなかったことを確信し達成感で満たされ涙する。音楽を通して、仲間や観客と「感動を共有する」ことが相乗効果となり、学生たちは自信を獲得し、保育士・幼稚園教諭として大切な「感性」を養うものである。

この卒業記念発表会での音楽表現の実践は、長い伝統に裏付けされ、卒業生が度々来校し就職後の心の支えとさえなっていると発言するほど、学生の成長は著しく、教育効果が大きいと実感している。教員は、学生たちが自発的に活動できるよう環境を整えるとともに、的確なアドバイスをしながら常に側面から支援していく。今後は、学生の生の声をアンケート調査などによって具体的に検証し、授業の在り方の参考にしていきたい。

3. 言葉・言語表現の観点から ～豊かな感性は言葉の力に～

社会人として円滑な人間関係を築くには、社会人として求められる言葉遣いができなければならない。特に保育・幼児教育の現場においては、保護者とコミュニケーションを取ることが多く、その際に礼儀やマナーも求められる。また、保育者は日々、子どもたちとたくさんの言葉を交わす。時には褒めたり、認めたり、指摘をしたり、子どもと一緒に笑ったり、泣いたり、感動したりする中で信頼関係を育んでいく。このような日々の生活において、子どもたちは保育者の話す言葉を聞き、時には保育者の言葉の真似をしながら、自分自身の言葉を獲得していく。つまり保育者が発する言葉の全てが、子どもが言葉を育む際のモデルとなる。学生たちは、そのことを理解しているつもりであっても、何気なく使っている言葉が不適切であることに気づいていない者、コミュニケーション能力や感性が乏しく子どもの気持ちを汲み取った言葉をかけてあげられない者も見られる。私たち教員は、学校生活の中で本人が気付くことができるよう働きかけるのは勿論、生活経験が不足している現代の若者に対し、様々な経験の中で、感性を磨く機会、自己の見識を広げる機会を作っていく必要がある。本校では、その一番大きな機会が卒業記念発表会であると考えている。

現在の卒業記念発表会における3部門のうち、ここでは「司会進行部門」の説明をする。司会進行と聞くと、一人や少数で舞台やその会を進めていく人と思われるだろうが、ここでいう司会進行とは、人形劇やオペレッタと同じ「部門」であり、毎年10名程度のメンバーで構成される。司会進行部門の役割は次の3つであると考えている。①卒業記念発表会のオープニングからエンディングまでを一連の会として繋いでいく。②ステージ上の演目と演目の間は緞帳が閉まる。その間も緞帳の前や会場

全体を使い、観客が楽しく心温まるような企画を提供する。③保育・幼児教育を学んできたものの集大成として、子どもから大人まで伝わる様々な保育技術（児童文化財）を披露する。このことから、司会進行部門は位置的なことは勿論、会場に直接的に言葉を投げかけ反応に応えることから、観客との距離が一番近い部門である。役になりきる劇などと違い、立ち振る舞いや咄嗟の対応、言葉遣いなど、普段の姿が出てしまいやすいため、常に笑顔を心がけ、見られているという意識を持って臨んでいる。また、これまでに行ってきた内容を3つの分野に分けて表すと以下のようになる。

- お話の技法…大型紙芝居、大型パネルシアター、ペープサート、影絵、ブラックライトシアター
マリオネットシアター等
- 音楽・リズム表現 ①演奏…ハンドベル演奏、器楽演奏、手作り楽器演奏、グラスハーブ等
 - ②リズム…手遊び、リズム遊び、ボディーパーカッション等
 - ③歌・ダンス…体操、ラインダンス、ボンボンや旗などを使った踊り等
- 会場一体型ゲーム…シルエットクイズ、間違い探し、投げた物当てゲーム、文字当てパネル
マジック、言葉遊び、風船運び競争等

学生たちは、様々な題材を調べ、検討し、プレゼンテーションを行って内容を確定していく。やはり、よく練られていて内容が深く明確なもの、伝える能力の高いものはイメージしやすく、みんなの気持ちを捉えやすい。せっかく良い内容を考えても、それをプレゼンテーションの場で生かせない者もいるため、こちらから質問を投げかけたり、言葉を補ったりしながら、良き発想の芽を摘まぬよう学生の感性に働きかける援助を行っている。台本作成では、子どもたちに伝わる言葉、且つ、大人の方々に失礼のない表現を意識し作成していく。原作のあるお話であれば、話の筋を大きく変えてしまわぬよう気を付けながら、お話を膨らませていく。この作業はこれまで絵本などの児童文化財にどれだけ触れてきたかによっても感性に差が見られる。やはり、幼い頃から絵本に親しんできた学生は、想像力や発想力に富んでいる。入学後、自ら絵本を手に取り親しんできた学生も、その経験が財産となり、保育者として品のあるアイデアを出すことができる。しかし、絵本などに積極的に触れてこなかった学生は想像力が乏しく、テレビやビデオなどのメディアからの発想しかなく、ディズニーやジブリといった内容に偏ってしまったり、お笑いコントの笑いが子どもにとっても楽しいものだと思いつ込んでいたりする傾向が見られる。

様々な保育技術（児童文化財）の研究実践は、就職先の保育・幼児教育の現場で即活用できるものとなる。また、その時々々の反応に瞬時に対応する力や、見られている意識を持ち常に周囲に気を配ること、笑顔でいることなど、保育者として大事な資質能力となる。卒業記念発表会の公演では、毎回違う子どもたちが来場するが、決まって同じ反応を示す場面が毎年見られる。例えば、登場人物の行方を問われ、「あっち」「こっち」と答えたり、「ブブブ～（豚の声）」などリズムカルな擬音が入る場面で大笑いをしたり、繰り返しの場面では次第に子どもたちも一緒に口ずさんだりする姿がある。それは、大人とは明らかに違う子ども特有の反応であり、その世界観に入り込むことができる純粋な感

性を持っている。この発表会は、そういった子どもの興味や関心を理解し、子どもの心を捉えられるきっかけとなっていく。

4. 人間関係の観点から ～学生たちがめざすもの・領域「人間関係」より学ぶ～

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が平成 29 年 3 月 31 日に告示され平成 30 年 4 月 1 日より施行される。これら 3 つに共通することとして、幼児教育期間 3 年間で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として 10 項目が示された。これは、年長児から小学校入学にかけて、さらにその後まで続く子どもの成長していく姿であり、保育所や認定こども園では 0 歳児からの保育で育まれるものであると思われる。今回の改訂は、子どもや子育て家庭を取り巻く環境の複雑化や家庭や地域の子育て力の低下・地域における子育て支援の必要性など、現代の社会状況の変化によるものとする。今回の改訂では幼児教育・保育だけではなく、小学校以上の学習指導要録も同時改訂される。では、これらの教育の改革にあたり、子どもたちの生活の場である教育・保育の現場では何が必要なのか。五領域の「人間関係」の観点から、本校で毎年行っている卒業記念発表会「人形劇」の実践を考察する。

3 つの要領・指針に共通する 3 歳以上時の保育に関するねらい及び内容より、「人間関係」について考える。「人間関係」とは、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」とある。その「ねらい」は①幼稚園(保育所)の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。②身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。③社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。以上 3 項目であり、ねらいを達成するための内容が具体的に示されている。内容⑧には「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりなどする。」とある他、ねらいの②が今回の改訂で付け加えられており、教育・保育の現場で子どもたちが友達と工夫したり、協力したりすることが強調された。現代の学生は少子化社会における人間関係の乏しさや親の過保護・過干渉からみられる社会性や情緒性の未熟さなど問題点も多いと考える。これらの問題点を改善すべく本校の卒業記念発表会「人形劇」の実践の様子を考察する。

人形劇製作は人形係・大道具係・脚本係・音楽係に分かれて作業が進められる。各係 5～6 名での活動であるが協同性が乏しく、作業がうまく進まないことが問題となることが多い。卒業記念発表会という同じ目的を持って活動しているはずであるが、共通の目的意識や規範意識・帰属意識を持って活動することが難しいのである。しかし学生たちも問題点を抱えながら、時には喧嘩をし、涙を流したり、可愛い人形を見て笑いあったり、互いに意見をぶつけあったり、様々な感情を抱きながら約 4 か月の人形劇部門の活動を行っていく。卒業記念発表会は全て手作りの舞台であり、全く何もない状態からの製作であるため、確かに作業を進めていく難しさはあると思われる。舞台も会場によって大きさが違うことから人形の大きさも考えなくてはならず、舞台に対しての人形の大きさや背景の表現の仕方などを各自の経験や想像力を持ち寄って決めて行くが、経験不足から中々自分の考えを形にす

ることが出来ず自分たちの力のなさを感じ落ち込み、悩む中で、学生同士の関係も悪化していく。それでも難問を乗り越えた時の嬉しさや楽しさを学生たち自身が感じ徐々に気持ちも明るく楽しさを感じられるようになる。人形を動かす頃には、学生同士が人形の動かし方を工夫したり、模索しながら練習したりと集中力も高まってくる。学生たちが一番楽しみにしていることが、発表会で幼稚園や保育園の子どもたちに見てもらふことである。自分たちの人形劇を子どもたちに見てもらい、楽しんでもらう。子どもたちのキラキラとした眼差しや子どもたちの素直な歓声を聴き学生たちも笑顔になる。発表会前に様々な人間関係での葛藤や苦しみが一瞬にして消える瞬間である。

社会状況の変化により、学生たちが成長してきた過程の中にも、これから関わり育てて行く子どもたちが身につけなければならないことと同様のことが足りていない例が多く存在するように思われる。そのような環境において、集団での取り組みは領域「人間関係」を含む五領域の要素を身に付けることができ、「幼児教育において育みたい資質・能力」の三本柱となる「知識及び技能の基礎」・「思考力、判断力、表現力等の基礎」・「学び向かう力、人間性等」を育てるものとなる。同じ目標を持ち切磋琢磨を繰り返すことの大切さ、集団内の自分を知り葛藤しながらも帰属意識を高めること、なにより卒業記念発表会という同じ空間を学生たちと子どもたちで共有し共感できることは互いの成長となるであろう。そして、自己の自信となることであろう。

5. 表現遊び・リズム遊びの観点から

幼児期後期は、現実にはないものを心の中で思いそれを真似たり、ごっこ遊びをしたりすることなどが多くみられる。さらに、ものの見方や考え方も自己中心的だが、少しずつ視野や行動が広がり、友達とのかかわりを意識する気持ちが芽生える時期でもある。このように学び方の基礎を身に付け豊かな感性を育む大切な時期には、生活や遊びを通して「おもしろい」「すごい」「不思議だな、なんで？」など様々な感動に出会う。その思いが何らかの形で表現され、家族や友達など周囲に受け止められた時、表現したことの喜びを味わい、更なる興味・関心へと繋がっていく。幼稚園教育要領には「表現」の領域について「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と示されている。幼児が自発的に活動し、表現する楽しさ、喜びを味わうことから自己実現への意欲が培われると考える。本校の「表現」領域は「遊びを通した総合的な指導」として、身体表現を様々な内容で取り組んでいる。表現遊びとリズム遊びについては、幼児が一人遊びから友達など他者とのかかわりを深め、試行錯誤を繰り返しながら共通の目的や喜びを味わえるような取組をとおして、学生たちは学び身に付けている。

感性とは人間としての総合的な能力の高さであり、一例として、心の感性と体の感性とに分けられる。そのためには幼児期には様々な体験や経験を通して表現していくことが求められている。美しいものや感動する出来事に触れ楽しく表現することや、生活や遊びの中から音や動きを自由に表現したり演じたりすることで豊かな感性や表現能力を育む。そのための身体表現は表現遊びとリズム遊びからなり、幼児自身がどのように感じ、どのように考えたことを他者に伝えることができるのか。学生

は、リズム歩き（スキップ、ギャロップ、ツーステップ）、動きの表現方法（速度・強弱・空間の変化）、事象の表現（自然の音、動物の生活、人の感情）リズム楽器の制作（マラカスや太鼓、タンバリンなど）に取り組み、その感じる能力と表現する能力を育てている。

領域「表現」の表現遊び・リズム遊びを通して学生たちは多くのことを身に付けている。幼児は毎日の生活や遊びから多くのことを学ぶこと。だからこそ学びの基礎の場である幼児教育は重要であり、そこにかかわる教師の使命は重いことなどである。2年間本校で身に付けた「表現遊び」「リズム遊び」の知識・技術は卒業記念発表会の様々な場面で随所に活かされている。

右の表は過去3年間の実績であるが、本校が長年にわたって取り組んできた発表会は、ただ演目を演じてきたのではなく学生が2年間で学習してきたことの集大成であるとともに、今後かかわるであ

ろうと思われる園児と教師としての視点での発表会である。この発表会は学生たちを一回りも二回りも成長させて学び舎から社会人として踏み出す最後の試練の場である。今後もこの活動を継続していくが、時代の変化とともに求められる幼児教育とそれにかかわる教師の姿を追求していきたい。

発 表 演 目	表現遊び・リズム遊びとのかかわり
「オペレッタ」 ヘンゼルとグレーテル(H28) オズの魔法使い(H27) 人間になりたがった猫(H26)	・ 幼児が喜ぶオペレッタの選択 ・ 幼児の遊びの動きを演目の中で再現 ・ 幼児の想像力を喚起する動きづくり ・ 幼児のできるリズム感で歌い踊る ・ 幼児の好きなBGMの選択
「人形劇」 アラジンと魔法のランプ(H28) 西遊記(H27) エルマーの冒険(H26)	・ 幼稚園等の現場で活用可能な人形制作 ・ 幼児が喜び、可愛いと思う人形の制作 ・ ワクワク、ドキドキなど冒険心があり、夢が見られる演出 ・ 愛とやさしさ、勇気と正義など道徳的価値も盛り込む
「司会進行」 大型紙芝居 ダンス、マジック、手遊び 器楽演奏、マーチング等	・ 幼児と一緒に遊べる内容 ・ 「なぜ、どうして」と考えさせる演目 ・ 手作り楽器も活用 ・ 幼児がやってみたくないと身を乗り出すような演出

6. 保育・教職実践演習の観点から

文部科学省によると、教職実践演習の趣旨は「他の教職課程の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として統合・形成されたかを、課程認定大学が自らの養成する教師像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』として位置づけられるもの」としている。また、厚生労働省は、保育実践演習の目標として、1. 保育に関する科目横断的な学習能力を習得する。2. 保育に関する現代的課題についての現状分析、考察、検討を行う。3. 問題解決のための対応、判断方法等について学びを深める。4. 必修科目（保育実践演習を除く。以下同じ。）及び選択必修科目の履修状況を踏まえ、自らの学びを振り返り、保育士として必要な知識・技能を修得したことを確認する。の4つを示している。

本校の卒業記念発表会は、教育課程上「卒業演習」であり、「保育・教職実践演習」そのものとして取り組まれている活動ではない。しかし、上記のような保育・教職実践演習の趣旨や目標に照らし

合わせてみると、いわゆる「学びの集大成」としての取り組みである卒業記念発表会は、そこで求められる学習を大いに補完・強化する役割を果たしているといえる。

また、文部科学省は、教職実践演習の授業の実施にあたって含めることが適当であるとされる事項として、①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項、を挙げている。同様に、保育実践演習の「内容」として厚生労働省は「必修科目及び選択必修科目の履修状況や保育実習を通しての学び等を踏まえ、保育士として必要な知識技能を修得したことを確認する。」とし、その具体的な方法・内容の参考例として、「1. イントロダクション・これまでの学修の振り返りについての講義・グループ討論、2. 保育士の意義や役割、職務内容、児童に対する責任等についてのグループ討論。ロールプレイング、3. 社会性、対人関係能力、児童理解等についてのグループ討論、4. 保育内容等の指導力についての講義・グループ討論、5. 資質能力の確認、まとめ」を挙げている。これまでの各領域の記述に見られるように、こうした保育・教職実践演習に求められる内容のほぼ全てにおいて、卒業記念発表会の活動は、関連を持った取り組みとなっている。

卒業記念発表会の制作にあたっては、これまでに各領域から述べられたように、2年間の学びを振り返り、様々な知識・技術を総動員しなくてはならない。また、部門と言うグループでの取り組みは、一人ひとりが責任を持って事に当たることはもちろん、周囲の学生と良好な人間関係を築くことが重要になる。さらに保育者になる者として、こどもにふさわしい作品を作り上げるという意味では、単に知識・技術だけでなく、豊かな感性や人間性が求められる。具体的に言えば、例えば、セリフ一つ取っても子どもにとって理解しやすい言葉、かつ、子どもに与えるにふさわしい言葉遣いになるよう何度も検討を重ねたり、演目として取り上げる話の原作が悪者を倒す（殺す）設定であっても、どこまでの暴力的な表現が許されるか、悪者の命を奪うのか否かといったことで、原作にこだわらず、自分たちの作品を子ども達に見てもらうためにふさわしいものにするために、何度となく話し合いをし、シナリオを書き換え、演じ直すという作業を繰り返して作り上げている。こうした取り組みが、保育者としてあるべき言動を取ろうと意識することや、子どもの理解へとつながっている。

このように、卒業・就職に向けた約4か月間の取り組みは、学生を社会人として、また保育者として育てていくにあたって、これまでの2年間の振り返り、あらゆる学びの成果を発揮する「2年間の学びの総まとめ」であるとともに、この4か月間の取り組みを通して更なる成長を遂げる「2年間の学びの総仕上げ」としてとても大きな意味を持つ取り組みになっている。

なお、卒業記念発表会は、その名の通り2年生の卒業制作としての活動であるが、1年生も会の運営や1年生発表と言う形で参加し、2年生と活動を共にする。その中で、2年生の会を成功させようとする強い思い、一生懸命な取り組み、保育者として相応しい態度を徹底しようとする姿に触れ、強く感化されるのである。1年生から2年生へと移り変わる時期の、この卒業記念発表会での経験は、学生を「保育者になりたいと思う者」から「保育者を目指すために努力する者」へと確実に変えてい

き、その学習態度や意欲に大きな成長をもたらす。このように卒業記念発表会は、1年生にとっても、重要な教育効果をもたらすものとして取り組まれている。

おわりに

卒業記念発表会は、これまでも教育的効果を実感して取り組まれていた活動ではあるが、今回このように改めて各分野・領域の目標・目的などに照らして検証してみると、“全て手作り”で取り組まれている活動であることから、様々な領域の学びが生かされ、また育てられていることがわかった。今回は専任教員が担当する科目・領域に限定したが、例えば、造形表現なども、各部門での大道具・小道具、背景、衣装、人形の制作等、この活動に取り組むにあたって非常に重要な関連を持つ領域となり、まさに保育者としてのあらゆる力が試される活動となっている。つまり本校の保育者養成にとって、それまで学んだ知識・技術を総動員して取り組む総合的な学習の機会であり、2年間の集大成であるとともに、保育者としてさらにもう一步成長を遂げる2年間の総仕上げとして、大切な役割を果たしている。一方で学生数の減少など、発表会の規模が縮小化していく中で、今後どのような活動を展開していくべきかが課題となっている。単なる記念行事ではなく、やはり保育者として成長できるための活動であることが大切であり、われわれ教員の実感としては非常に大きな教育効果を上げる活動として、膨大な時間と多額の費用をかけて取り組まれている活動ではあるが、その教育効果の部分を今後、より一層明らかにしていかなければならない。そのためには、現状では活動反省が不十分であるとともに、教育効果測定の数値的な実証が十分にできていないといった課題が残っている。今後、卒業生や在校生に対する活動への取り組み前後の意識調査なども活用しながら、明らかにしていきたい。

参考文献

- 1) 幼稚園教育要領、文部科学省、2017
- 2) 保育所保育指針、厚生労働省、2017
- 3) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領、内閣府、2017
- 4) 田宮縁：領域人間関係、萌文書林（東京）2013
- 5) 松本園子・永田陽子・福川須美・堀口美智子：実践家庭支援論、ななみ書房（神奈川）2014
- 6) 民秋言編：幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立と変遷、萌文書林（東京）2017
- 7) 中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会（第62回）配付資料 8-2 教職実践演習の進め方及びカリキュラムの例、文部科学省、2011-03-09.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/attach/1303555.htm